彩の時

漢字絵本で幼児教育

大津の幼稚園が大学と連携

「この漢字は何て読む?」。幼稚園の先生がカードを指さして園児たちに尋ねると、元気のいい声が響き渡ります。出された問題は、直前に音読した「兎と亀」や「赤頭巾ちゃん」といった昔話の絵本に出てきた漢字。絵本は特別に作られたもので、斬新なイラストが描かれているほか、振り仮名のない常用漢字が使われています。

「漢字を読む力が付けば、考える力も伸ばすことができる」。大津市三大寺にある聖パウロ学園・瀬田光泉幼稚園では、田中好三理事(71)の方針の下、京都精華大（京都市左京区）の学生らと共同で30タイトルの漢字絵本を作成、幼児教育に生かしています。

漢字絵本を用いた授業は、年少から年長まですべてのクラスで行われており、園児たちは先生に続いて自分の手元にある絵本を音読します。振り仮名が付いていなくてもすらすら、カードに書かれた「亀」や

漢字絵本と漢字カードを使って学習する園児たち＝大津市三大寺の聖パウロ学園・瀬田光泉幼稚園

「語彙（ごい）が増え、考える力伸びる」

「競争」といった漢字の読みもばっちりです。

挿絵は、京都精華大デザイン学部の角谷和好講師（グラフィックデザイン）の監修で、学生1人が1冊ずつ担当。文字の大きさや位置などのレイアウトも他の学生がすべて受け持ち、2012年度から毎年10冊ずつ、14年7月までに30冊を作成しました。

オールカラー20ページに上る絵本の挿絵は、学生の個性を反映。幼稚園側と絵柄のイメージを相談しながら作業を進めましたが、「三匹の子豚」を担当した学生は「オオカミが怖過ぎる」と言われ、何度も描き直したといいます。角谷講師は「相手の要望を聞きながら描く訓練は、大学の授業ではできないこと。プロを目指す上で良い経験になったのでは」と振り返ります。

レイアウトを担当した同学部4年の田中詩織さん(22)は「どうやったら分かりやすいかな」と考えながら文字を入れました。実際に子どもたちに読まれていると思うとうれしい」と目を細めました。

絵本を繰り返し読むことで文章を覚え、使用されている漢字も自分のものにしていきます。一見丸暗記のようですが、語彙（ごい）が増え、さらには考える力も身に付いていきます。田中理事は「言葉を覚えるのに早過ぎるということはない。幼児期に多くの言葉に触れれば、その後、能力を発達させる上でとても重要な経験になる」と話しています。

出来上がった漢字絵本。「王様は行列の用意をさせ」というように、振り仮名のない漢字が並ぶ

ウーマンズ eye